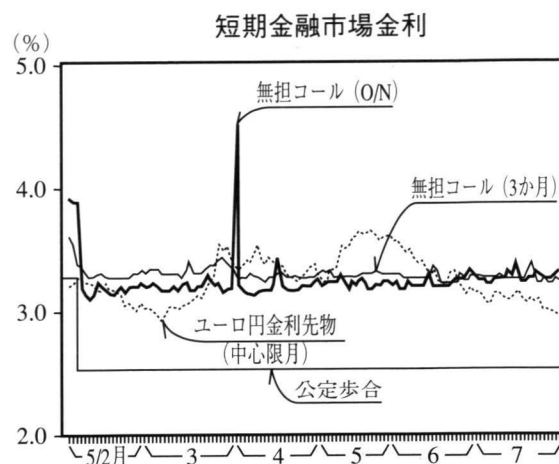


金 融 市 場 動 向 (平成5年7月)

1. 短期金融市場

7月中のオーバーナイト・レート（無担コール）、ターム物レートは、それぞれ横ばいで推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、月中を通じてやや低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は45兆2,876億円と、前月（44兆7,332億円）を若干上回った。



2. 資本市場

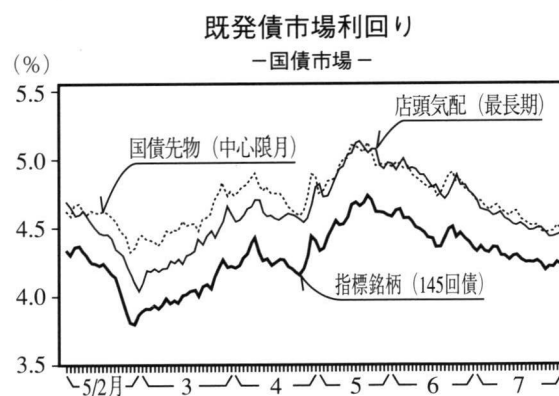
7月の国債利回り（145回債）は、円高の進行や米国長期金利の低下等を受けて緩やかに低下し、4.210%（前月末4.340%）で越月した（国債先物中心限月4.456%＜前月末4.726%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回った一方、先物は前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、総じて動意が乏しいなかで緩やかに上昇し、20,380円

（前月末比+790円）で越月した。株式出来高（東証第一部月中1営業日平均）は、2.68億株と前月（3.50億株）を下回った。

起債動向をみると、長期国債（8月債、10年＜価格競争入札分＞）は、好調な入札となった（7月22日入札分：募入平均利回り4.273%、応募倍率5.23倍）。短期国債についても、順調な入札結果となった（7月15日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り2.936%、応募倍率2.68倍）。また、超長期国債についても入札が行われ、総じて順調な入札結果となった（7月6日入札分：募入平均利回り5.336%、応募倍率2.66倍）。



国内公募普通社債の発行は、7月入り後債券市況が堅調に推移するなか、発行体が金利先安感等から起債先送り姿勢を強めたことから、前月比大幅に減少した（6月5,400億円→7月670億円）。

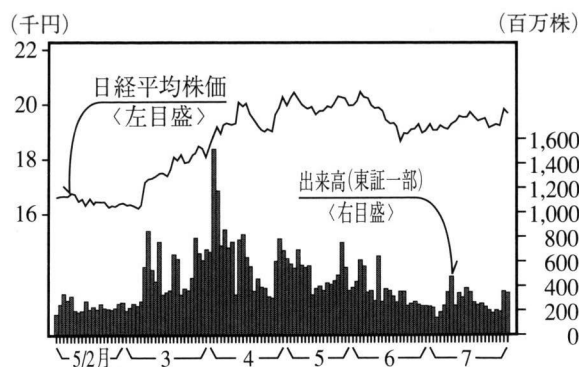
国内エクイティ市場での発行（7月払込み分、増資は除く）は、高水準の前月をさらに上回った（6月2,000億円→7月2,480億円）。

3. 外国為替市場

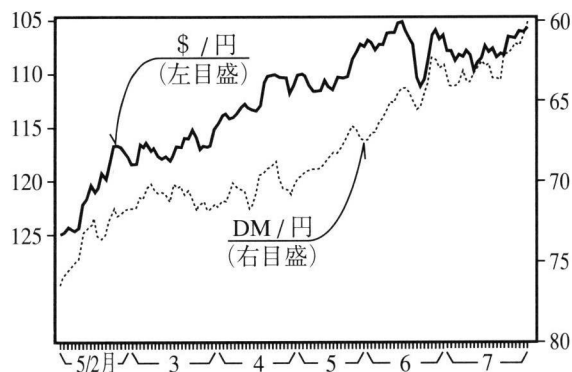
7月の円相場は、上旬から中旬にかけて円高が一服する場面もみられたが、下旬入り後、欧州通貨情勢の緊張等を背景に対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）が上昇し、月末には60.09円と既往最高値を更新して越月した（前月末62.70円）ほか、対米ドル（直物相場、終値）でも上昇して、結局105.60円で越月した（前月末106.51円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は153.0億ドルと、前月（186.5億ドル）を下回った。

株 式 市 場

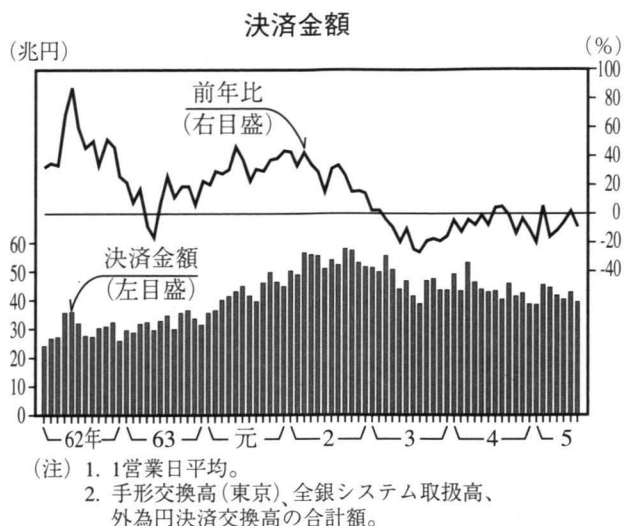


外国為替市場



4. 決 済

7月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、全銀システム取扱高、日本銀行当座預金受払額は前年同月を上回った（全銀システム：前年比+1.3%、日本銀行当座預金受払：同+8.0%）が、手形交換高（東京）、外為円決済交換高はそれぞれ前年同月を下回った（手形交換：前年比△12.3%、外為円決済：同△9.3%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）は、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+7.5%、振込口座振替：同+18.9%）。



5. 資金需給、金融調節

7月の資金需給をみると、銀行券要因が6,762億円の余剰（前年同月9,400億円の余剰）となった一方、財政等要因は、運用部や国債利払い等の支払いがみられたものの、夏季賞与にかかる源泉所得税を中心とする税揚げや保険等の受入れがかさんだため、1兆7,865億円の不足（前年同月9,995億円の不足）となり、全体では1兆1,103億円の不足（前年同月595億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B買戻し等により資金を供給した。

8月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、ボーナス資金の還流などから、7,000億円程度の余剰（前年同月6,318億円の余剰）となる見通しであるほか、財政等要因も、国債償還、国民・厚生年金の定時払い等がかさむことから、2兆6,100億円程度の余剰（前年同月5,781億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では3兆3,100億円程度の資金余剰（前年同月1兆2,099億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

6月のマネーサプライをみると、M₂+C D平残前年比伸び率は+1.4%と前月に比べ0.1%ポイント低下した。これは、財政要因（運用部の支払い増等）がマネー押し上げに働いたものの、マネー対象外金融資産へのシフトがみられたことによるもの。通貨種類別にみると、準通貨の

伸び率が上昇した一方、預金通貨、CDの伸び率は低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.1%と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。

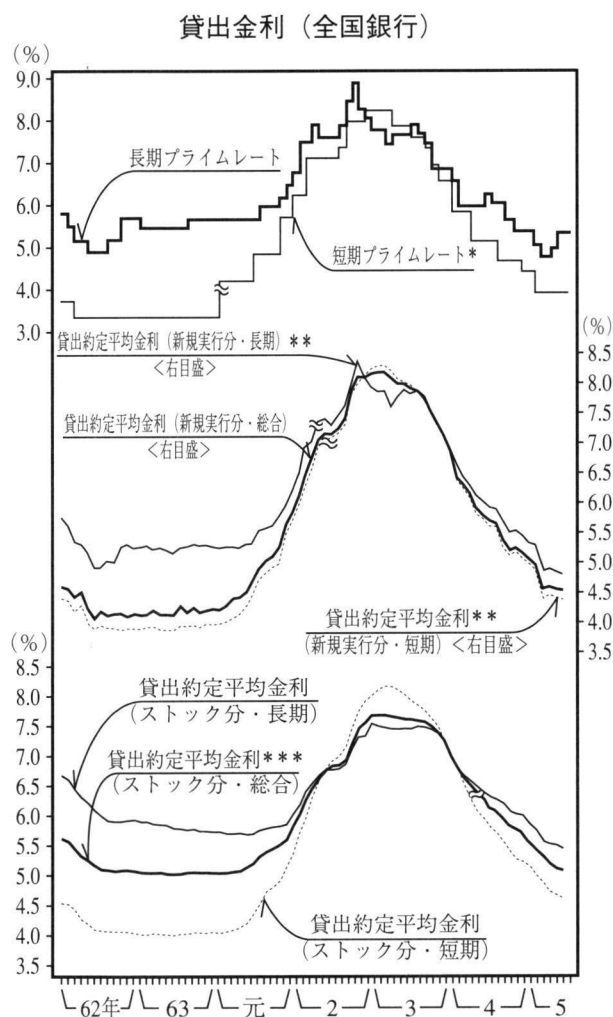
7月の銀行券平残前年比は+3.9%と前月比横ばいとなった。

7月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀II）は、前年比+0.9%と前月とほぼ同じ伸び率となった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀II）は、前年比+1.0%と既往ボトムとなった前月と同じ伸び率となった。

7. 貸出金利

6月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、前月に引き続き、短期が前月比小幅低下（前月比△0.037%）したほか、長期も長期プライムレートが2か月連続で引き上げられた（6月1日、5.1%→5.4%）にもかかわらず、約定平均では前月比小幅低下（前月比△0.006%）し、総合でも小幅の低下となった（5月4.488%→6月4.458%）。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに前月比小幅低下し（短期：前月比△0.044%、長期：同△0.066%、当座貸越：同△0.023%）、長期は既往ボトムの5.362%となった。この結果、総合（当座貸越を含む）でも引き続き低下傾向をたどった（総合：5月5.089%→6月5.034%）。



(注) * 元年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 2年4月以降は地方銀行IIを含む。

*** 4年4月以降は当座貸越を含む。

（平成5年8月12日、調査統計局）